

〈書評〉

Paul Robert Magocsi

*The Roots of Ukrainian Nationalism :
Galicia as Ukraine's Piedmont*

(University of Toronto Press, 2002, 214 p.)

島田 智子

本書は、トロント大学教授ポール・ロバート・マゴチ Paul Robert Magocsi が上梓した論文集で、汎スラヴ主義の風潮が高まるロシア帝国内の状況とは対照的に、オーストリア帝国の弱体化に伴って政権と歩み寄り、地域農民に対する支配力を強めていったポーランド人の存在に相対しながらウクライナ人としてのナショナリティーを形成し、以後ドニエプル・ウクライナ（ロシア帝国内のウクライナ）のウクライナ人よりも自覚的なウクライナ人としてナショナル・ムーブメントの先頭にたっていくガリツィア・ウクライナ人の19世紀を、特にその知識層の意識に焦点をあてて論じたものである。

ガリツィアとは、現ポーランド南東部からウクライナ西部にかけて広がる地域の歴史的名称である。現在ではカーゾン線に沿ってクラクフを含むガリツィア西部がポーランド領に、リヴィウ、テルノピリ、イワノ・フランクフスクの3州からなるガリツィア東部がウクライナ領になっているが、本書の舞台となっているのは、住民の大多数をウクライナ人農民が占めていた東ガリツィア、あるいはウクライナ・ガリツィアと呼ばれるガリツィア東部である。ガリツィアについて日本では、ポーランド側の西ガリツィアに関する研究が早くからあるほか、近年ではポーランド人とウクライナ人の間で辛酸をなめたユダヤ人のアイデンティティに焦点をあてた研究も現れているが、東ガリツィアの存在をウクライナ・ナショナリズムの原点として取り上げた研究はまだ見られない。他方、北米のウクライナ史研究においては、本書に収められた論文が書かれた時期と前後して出版されたものだけに限っても、民衆レベルにおける民族意識の形成を追ったヒムカ J. P. Himka の『ガリツィア地方の村人と19世紀のウクライナ民族運動』⁽¹⁾や、マルコヴィッツ A. S. Markovits とシシン F. E. Sysyn の編による論文集『民族形成とナショナリズム政策—オーストリア領ガリツィアに関する評論集—』⁽²⁾、コジク Jan. Kozik のポーランド語による著作をオートン Lawrence D. Orton らが翻訳した『ガリツィアにおけるウクライナ民族運動—1815年から1849年にかけて—』⁽³⁾などがある。ウクライナ・ディアスポラ史学の大家ルシャク・ルドニツキー Ivan L. Rudnytsky の論文「オーストリア支配下のガリツィアにおけるウクライナ人」⁽⁴⁾が既に1960年代の後半に出ており、ウクライナのナショナル・ムーブメントを牽引し、今日においても「ナショナル」なカラーを鮮明に打ち出しているこの地に対する関心の高さが窺われる。

本書の著者であるマゴチは、1996年に、ウクライナ人だけではなくウクライナの地に居住し

た様々な民族に視線をあてた清新なウクライナ通史『ウクライナの歴史』⁽⁵⁾をものした北米ウクライナ史学の権威である。自身がアイデンティティとするカルパト - ルーシン研究の第一人者でもあることから、早くからガリツィアに関心を示してきた研究者の一人で、マルコヴィッツとシシンの論文集に参加しているほか、1983年にも単独でガリツィアの歴史研究と文献案内に関する著書をだしている⁽⁶⁾。さらに、2005年末にもハーン Christopher Hann との共編による論文集を予定しており⁽⁷⁾、本書も一連のガリツィア研究の一環として位置づけられる。

本書は10の小論からなっており、そのうち8本は既に北米の学術誌に発表したものの改訂版である。形式的な意味合いから重複部分が削除されたり、参考文献等が更新されたりしているほかは、初出のまま殆ど手を加えられていない。前述の研究案内書が刊行された時期に続く80年代の終わりから90年代の初めにかけて執筆されたものである。内容は、最初期から現代(1996年の新憲法採択時)までのガリツィアの流れをたどった概説的な小史である第一章「ガリツィア - 歴史研究概要 -」、19世紀のウクライナ民族運動に対して新しい枠組みからの分析を試みる第二章「ウクライナの民族的再生」に続き、第三章「下位民族あるいは独自性を覆い隠された民族 - ハプスブルク帝国およびソヴィエト連邦支配下のガリツィア・ウクライナ人 -」から第四章「東のチロル人 - ガリツィアのウクライナ人と1848年革命 -」、第五章「ウクライナ人とハプスブルク家」にかけては、ガリツィアのウクライナ人とハプスブルク帝国との関わりについて、帝政ロシアやソ連のガリツィア政策と比較しつつ、前者が後者をどう受け入れていたかが論じられている。続くみつつの章、第六章「東ガリツィアのナショナル・ムーヴメントにおける一要素としての言語問題」、第七章「古ルーシ主義とロシア主義 - 19世紀末の東ガリツィアにおけるナショナル・イデオロギー分析のための新しい概念構想 -」、第八章「カチコフスキー協会と19世紀の東ガリツィアにおける民族的再生」は、インテリゲンツィア主導のナショナル・アイデンティティがどのようにして民衆に伝えられたかを、ウクライナ民族運動の主流とはなりえなかった古ルーシ主義やロシア主義の活動を通してみるもので、最後のふたつの章は、ナショナル・ムーヴメントの移行期において民族史料の編纂事業が果たした役割を取り上げつつ、19世紀後半のガリツィアの書誌学者で古ルーシ主義者であるイヴァン・レヴィーツキーの業績を紹介する第九章「ナショナリズムと民族書誌学 - イヴァン・E・レヴィーツキーと19世紀のガリツィア -」と、ウィーンに現存する資料をウクライナ史研究に利用することを提唱する第十章「ウクライナ研究の資料供給源としてのウィーン - 特にガリツィアに関して -」からなる。

本書全体を通して窺えるマゴチのガリツィア解釈の特徴として、彼がガリツィアでのナショナル・ムーヴメントをウクライナ全体の運動の線上に描こうとはしていない点があげられる。各論の冒頭部分において、「ウクライナ人口の比率からみると(ドニエプル・ウクライナと比べて)圧倒的に少数ではあるが、ウクライナのナショナル・ムーヴメントにおいて決定的な役割を果たした」というフレーズが繰り返し現れることから、マゴチが、ガリツィアのムーヴメントをウクライナ全体の民族意識の覚醒に重要な影響を与えたものとしてみているのは明らかである。しかしその反面、彼はウクライナの民族運動そのものを、単線的・直線的な運動 unilateral/unidirectional movement とはみておらず、政治的な独立がウクライナのナショナル・ムーヴメントの最

終的な目的であるという前提を排して、この問題を見直そうとしている。これは、前述の通史『ウクライナの歴史』においてもみられる、マゴチのウクライナ史解釈に特徴的な点である。

政治的な独立をナショナル・ムーヴメントの最終目的とすると、ウクライナの民族再生をひとつの直線的発展段階として捉えるフルシェフスキーのような見方か、それよりは多彩な観点が提示されているものの、やはりドニエプル・ウクライナの運動とガリツィアのそれとの交流を重視するルドニツキーのような見方しか生まれてこなくなる。その場合、独立に貢献した度合いで運動の内容が評価されることとなり、貢献の度合いの低い運動が研究史の中で軽視される傾向が生じる。マゴチが、新しい枠組みを提示しようとするのは、独立意識の覚醒に貢献することの少なかつた運動の内容が看過されたままでは、ガリツィア、ひいてはウクライナの民族運動の本質そのものが見失われかねないことを懸念してのことである。このような観点から本書でもマゴチは、19世紀後半に「ナショナル」なウクライナ主義が運動の主流を占めていく中で非主流となっていく古ルーシ主義やロシア主義（モスクワ主義）の業績をとりあげ、これらが、かつてイワン・フランコの表したような「(社会的な) 病理の兆候」としてではなく、ウクライナの文化的伝統の中から生まれた正統な知的現象として研究されるようになってはじめて、ガリツィアのナショナル・ムーヴメントが理解できると主張するのである（118ページ）。

マルクス主義史学における革命への貢献という前提や、非マルクス主義史学における独立の達成への貢献という前提を外す代わりとしてマゴチが用いているのが、「多重のアイデンティティ（あるいは忠誠心）multiple identity/loyalty」と、「相互に相容れることのないアイデンティティ mutually exclusive identity」というふたつのコンセプトの相克である。彼はフロツホを援用したナショナリズムの三段階理論やウクライナの地政学的特質とともに、このふたつのコンセプトの相克を用いて近代ウクライナの民族的再生を読み解こうとする。ここでマゴチのいう「多重のアイデンティティ（忠誠心）」とは、ウクライナ人としての固有のアイデンティティを持ちながらも、同時にロシア帝国、あるいはオーストリア帝国に対する忠誠心をも有する状態で、他方、「相互に相容れることのないアイデンティティ」とは、一方のアイデンティティを選択することで、それ以外のアイデンティティ、つまり属している帝国なり政権なりから押し付けられる（あるいは与えられる）上からのアイデンティティを拒絶する排他的なナショナル・アイデンティティのことである。ナショナル・ムーヴメントというものの性質から考えたとき、これらは前者から後者に進んだと見るのが妥当なようであるが、マゴチはこのふたつのアイデンティティが一方から一方へ移行したのではなく、ムーヴメントのそれぞれの段階で両者が共存しえた、と主張する。そしてこのふたつのアイデンティティが（ロシア帝国やソヴィエトの統治下とは違って）相互に有益な形で機能していたのが、オーストリア帝国であったとするのである。

これは確かに興味深い論点を提示している。しかし惜しむらくは、理論に説得力が欠けている。個々の事例によって論が補強されていないために、示された理論的枠組みの正当性が証明されず、枠組みの提示にとどまってしまっているのである。例えば、ふたつのコンセプトによる新しい枠組みを提示している第二章の「ウクライナの民族再生」においてマゴチは、「ウクライナの民族的覚醒が思想的に一方向に向かうものであり、シェフチェンコ以降ウクライナの指導層が

徐々にではあるが次第に前者から後者に移行したというような見方はされるべきではない」(52ページ)と述べている。しかし、これに続く部分で、「アントノヴィッチやフランコのような多くの人物が排他的な立場を展開していく一方で、コストマーロフやクーリシ、ホロヴァツキーのように、後になって排他的な立場から多重のアイデンティティを認める立場に移行したのもあった」とし、この移行は日和見主義的な政治的移行ではなく、ウクライナの文化的背景を反映したものであるという。

これは、理論提示としては当を得ている。これらの指導者たちが政治的な観点からだけではなく、文化的な観点からのウクライナの独自性を問題としていたことも、この分野における他の研究から分かっている。しかし、厳密に内容を検討すると、マゴチ自身が彼らの思想的なアイデンティティを論じているのか、政治的な立場を論じているのかが判断しがたい。実際に政治的な立場だけをとって比較してみれば、コストマーロフやクーリシを後者の立場におく一方で、(キエフ・フロマダの主導者として穏健な立場を保持した)アントノヴィッチを前者の立場にすえる理由が理解できない。逆に、純粹に思想的なアイデンティティについて述べているのだとすると、今度はコストマーロフやクーリシの思想的転換の有無が問題となってくるのであるが、マゴチはこれらの個々の事例に対して、政治的にも思想的にも十分な検討を加えることなく判断を下しているため、その分析に首肯しがたいのである。

マゴチの理論が説得力を欠くもうひとつの要因として、彼が文化的な見地を重視する余り、政治的な側面を軽視する傾向があげられる。これは他の評者からも指摘されている点で、例えば、アントノヴィッチの評伝を書いているアルバータ大学のボフダン・クリッドは本書に対する批評の中で、マゴチは彼自身が提示した重要な論点である「なぜ(ガリツィアの社会で)ウクライナ主義の傾向が主流を勝ち取ったのかを知りたいければ、なぜ古ルーシ主義やロシア主義が敗れたのかを知る必要がある」(101ページ)という問題に対して、本書の中で満足できる答えを与えていないと指摘している⁽⁸⁾。クリッドは、この問題に対してマゴチが与えた文化的な観点からの説明、すなわち、カチコフスキー協会や古ルーシ主義のやり方が失敗したのは、彼らがガリツィアの地域的特性に根ざした、より高い文化を提供できなかったからだとする解釈は確かに有益であると認めている。しかし、分析においては民族運動の社会的・政治的な側面に対しても十分な注意が払われるべきだと主張し、ガリツィアではウクライナ主義者のほうが、社会的にはより進歩的で、政治的にはよりリベラルあるいは社会主義的な潮流や政党を提示することができた点を強調する。クリッドは、この事実が、「なぜ(ガリツィアの社会で)ウクライナ主義の傾向が主流を勝ち取ったのか」という問いに対しても有効なヒントとなるだろうと主張するのである。クリッドの書評は全体として多分に辛口で、その指摘の中には頷けないものもあるが、上記の論点に対してマゴチが満足のできる答を提示していないのは事実である。クリッドもいうようにマゴチの主張は、政治的な側面に対する考察が乏しいため、結論において説得力の欠けている印象が拭えないのである。

しかし、それでもなお本書が一読に値するのは、マゴチが思想潮流における敗者にあてた視線そのものが貴重だからである。とりわけ、ガリツィアにおける古ルーシ主義やロシア主義とウク

ライナ主義の関係は、民衆との接し方や思想的距離、民衆による受け入れられ方、そして特に、その後の知的潮流の主流との連関において、19世紀前半のロシアにおけるスラヴ主義と西欧主義の関係に通ずるところがあり、潮流としての敗者である彼らに対する一層の研究がウクライナ史に対する理解を深めるとするマゴチの指摘は大いに頷ける。

19世紀のロシア史における西欧主義の思想、特にベリンスキーやゲルツェンの思想はその後のロシアの思想潮流の主流となったナロードニキやコミュニストの間で、その思想的源流として捨象されつつとりあげられていった。これに対し、スラヴ主義の思想はソヴィエト・ロシアでは等閑視されがちで、むしろこの分野においては欧米の研究が先んじてきた。しかし、ロシアの知の伝統、そしてその全体像を理解しようとするれば、いくつかの部分で西欧主義と共鳴しながら、独自の路線を選択した彼らの観点、とりわけ民衆や農村共同体に対する彼らの見解をみるのが必須であること、言うを俟たない。

同様のことが、古ルーシ主義やロシア主義に関してもいえる。「ナショナル」な潮流を追おうとする傾向の中では、敗者である古ルーシ主義やロシア主義は研究史の中で軽視されてきた。しかし、民衆啓蒙というウクライナ主義と同じ根から生まれたひとつの目的を有しながら、民衆との知的な距離を越えられなかった古ルーシ主義やロシア主義の思想こそが、「自分たちが何者でないかということ、つまりポーランド人でないということは明確に認識していても、自分たちが何者であるのかについて決することは非常に困難だった」(99ページ) ガリツィア・ウクライナ人の知の歴史を語っていよう。このような非主流を含めたムーヴメントが見直されることによって、ウクライナの近代史研究がはじめて独自の深みを有してくるというマゴチの主張は正鵠を射ているといえるだろう。

一昨年(2004年)末から昨年初めにかけて、ガリツィアは一躍世間の注目を浴びた。西側諸国、特にアメリカ合衆国、ポーランドによる強い干渉をうけての再選挙を経て、ようやく大統領の地位に就いたヴィクトール・ユーシェンコの支持基盤となり、通りをオレンジ色のスカーフが埋めつくしていたのがこれらの地域だったからである。大統領選に注目が集まるにつれ、ユーシェンコを熱烈に支援したガリツィア、特にその中心であるリヴィウの街の歴史も紹介されるようになったが、それらの多くは表面的なもので、オレンジ革命からおよそ一年を経た昨今、リヴィウを含むガリツィア地域は、「歴史的にポーランドやオーストリアとの関係が強かったせいで西側志向の強い地域」としてのみ記憶されてしまった感がある。

しかし、マゴチが指摘してきたように、ウクライナのナショナル・ムーヴメントは決して一方だけに向けた運動 unilateral/unidirectional movement ではなかった。そして、その根源ともいえるガリツィアのムーヴメントにしても、ドニエプル・ウクライナのムーヴメントとのみ連動していたわけではなく、「目に見える敵」として眼前にあったポーランド人の存在や、ヨーゼフ改革によって与えられた「上からのナショナリズム」が、その発展に大きな影響を与えていた。ガリツィアは、このような多方面からの刺激の中で知的変容をとげつつ、独自の「ナショナル」志向を持つに至ったのである。このようなナショナル・ムーヴメントの流れを考えると、現在の独立ウクライナにつながる一本の線としてウクライナ・ナショナリズムを捉えようとする見方と一

線を画し、潮流としての敗者となった古ルーシ主義やロシア主義の存在をナショナル・アイデンティティ形成の枠組みに取り込んで読み解こうとしてきたマゴチの取り組みは、今日しばしば耳にするような西欧と東欧、ポーランドとロシアの間での二項対立、そしてそれを支えたガリツィアの「ナショナル」志向という単純化された構図の背後にある、ウクライナの知が根源的に有してきた分裂志向に目を向けさせる貴重なものといえる。

注

- (1) John-Paul Himka, *Galician Villagers and the Ukrainian National Movement in the Nineteenth Century*, University of Alberta, 1988.
- (2) Andrei S. Markovits and Frank E. Sysyn (ed.), *Nationbuilding and the Politics of Nationalism: Essays on Austrian Galicia*, Harvard University Press for the Harvard Ukrainian Research Institute, 1982.
- (3) Jan Kozik, edited and with an introduction by Lawrence D. Orton, translated from the Polish by Andrew Gorski and Lawrence D. Orton, *The Ukrainian National Movement in Galicia, 1815-1849*, Canadian Institute of Ukrainian Studies, University of Alberta, 1986.
- (4) Ivan L. Rudnytsky, "The Ukrainians in Galicia under Austrian Rule", in *Essays in Modern Ukrainian History*, Ivan L. Rudnytsky, Peter L. Rudnytsky (ed.), University of Toronto Press, 1987. 同論文は、マルコヴィッツとシシンの *Nationbuilding and The Politics of Nationalism: Essays on Austrian Galicia* にも収められている。
- (5) Paul Robert Magocsi, *A History of Ukraine*, University of Toronto Press, 1996.
- (6) Paul Robert Magocsi, *Galicia: A Historical Survey and Bibliographic Guide*, University of Toronto Press, 1983.
- (7) マゴチは2005年末にも、ハーン Christopher Hann との共編による論文集 *Galicia: A Multicultural Land* の刊行を予定している。
- (8) Bohdan Klid, "Paul Robert Magocsi, The Roots of Ukrainian Nationalism: Galicia as Ukraine's Piedmont", *Canadian Association of Slavists*, volume 45, No. 3-4 (Sep-Dec 2003).

(関西大学大学院文学研究科・博士課程前期課程)